

## 花粉症患者動向調査（世田谷区内クリニック）

浅香耳鼻咽喉科クリニック 浅香大也

スギ・ヒノキ花粉シーズンに、世田谷区の浅香耳鼻咽喉科クリニックを受診した花粉症患者の受診状況を調査した。

### 1 調査期間

2024年1月4日～2024年5月12日

### 2 調査内容

#### (1) 初診・再診患者数の変動

上記期間に来院したスギ・ヒノキ花粉症患者に対して、診療日ごとの初診患者数、再診患者数を集計し、飛散花粉数との関連性を検討した。

※ 初診・再診について

初診：調査シーズンにおける、症状が出てから初めての受診  
(症状が出る前の初期治療としての受診は初診としない)

再診：初診としてカウントした後の受診

※ 飛散花粉数は、大田区のダーラム測定器で測定したデータを用いた。

※ 週計の期間は、患者数については月、火、木、金、土、飛散花粉数については日曜日～土曜日の合計数とした。

#### (2) 飛散花粉数と初診時の自覚症状、QOLとの関連性

(1)の患者に対し、全体の症状の印象について調査を行った。また、日本アレルギー性鼻炎標準QOL調査票を用いて初診時の自覚症状を検討した。

※ 初診時自覚症状と花粉数の相関に関する検討においては日曜日～土曜日の飛散花粉数の総和と月、火、木、金、土の患者の自覚症状の平均で検討した。

#### (3) 舌下免疫療法の効果測定

スギ舌下免疫療法を施行中の患者218名のうち、日本アレルギー性鼻炎標準QOL調査票の記入に同意を得た患者131名について、自覚症状の検討を行った。調査票は、スギ花粉シーズン終了後の5月にLINEで問診票を送信し、今シーズンを振り返って最も症状のつらかった時期の症状を記入してもらった。比較対象として、当院を受診した花粉症患者のうち、花粉飛散ピークの週を2週抽出（3月11日～24日：第11、12週）し、その時期に受診した初診患者の問診結果を用いた。

### 3 調査結果

#### (1) 患者数と飛散花粉数（表1、図1）

2024年の大田の飛散花粉数は、5,269個/cm<sup>3</sup>であり、前年の8割だった。総患者数は1,189名で、前年の8割だった。内訳では、初診患者数、再診患者数ともに前年の8割だった。2024年の舌下免疫受診患者は218名であった。昨年と比較して花粉総飛散量が8割に留まったため総患者数も減少したと考えられる。

舌下免疫療法は4年間の継続治療を勧めているため、患者数は今年の1.1倍であった。舌下免疫療法は、その有効性から希望者は昨年も多かったが、施行4年

が経過して治療終了となった患者数も一定数いたため 1.1 倍に留まった。

表 1 患者数と飛散花粉数

	2024年	2023年	2023年に対する 比率
飛散花粉数(個/cm <sup>3</sup> /シーズン)	5,269	6,884	0.8
総患者数(初診+再診)(人)	1,189	1,496	0.8
初診患者数(人)	895	1,104	0.8
再診患者数(人)	294	392	0.8
舌下免疫療法を受けている患者数(人)	218	198	1.1
花粉飛散開始日	2月14日	2月18日	

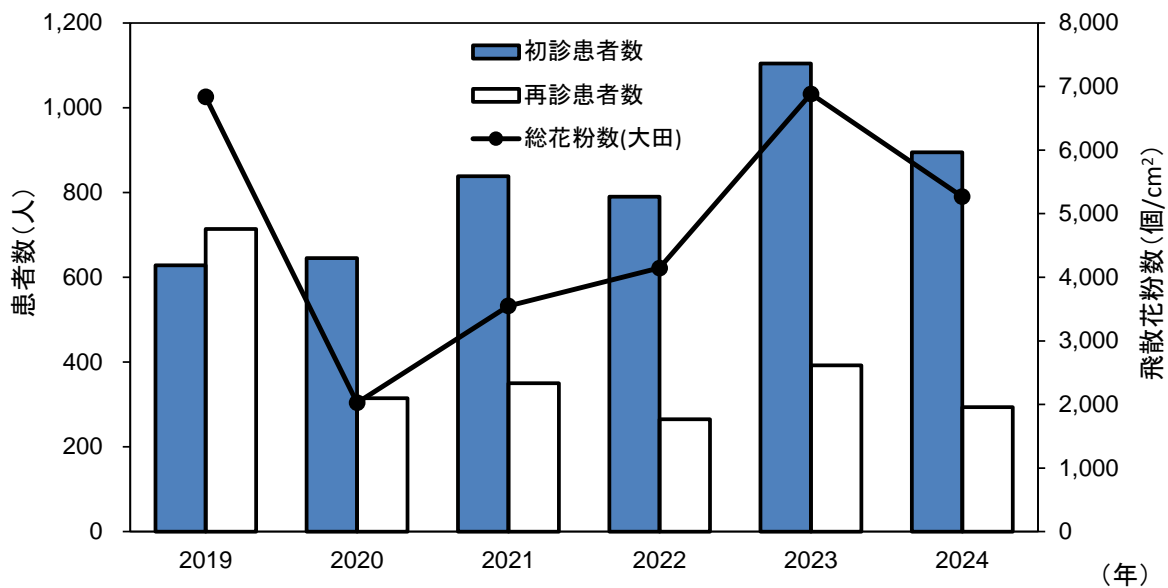


図1 患者数と飛散花粉数(2019年-2024年)

① 初診患者数の変動 (図2)

- ・ 花粉の飛散開始日は2月14日で、前年と比べて4日早かった。
- ・ 初診患者数の立ち上がり(30名以上/週)は、2月5日~2月11日(2024年第6週)であり、飛散開始日より約1週間早かった。
- ・ ピークの時期は、2月26日~3月3日(2024年第9週)であり、前年(2月27日~3月5日 2023年第9週)と同時期であった。
- ・ 初診患者数のピークは141名であり、前年(228人)の6割だった。
- ・ 初診患者の立ち上がりからピークまでは3週間であり、前年(5週間)よりも2週間短かった。
- ・ 初診患者数のピークは大田区の総飛散花粉数のピークの約2週間前であった。

② 再診患者数の変動 (図2)

再診患者数の立ち上がり(30人以上/週)は、3月11日~3月17日(2024年第11週)で、ピークは3月25日~3月31日(2024年第13週)だった。

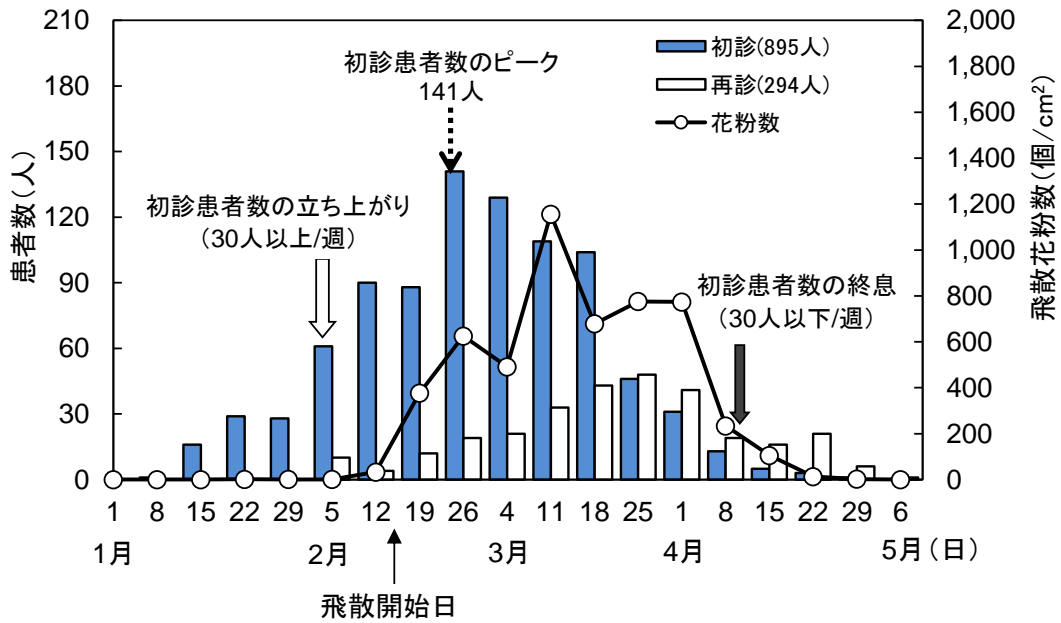


図2 週毎の患者数と飛散花粉数(2024年)

(2) 飛散花粉数と初診時の自覚症状、QOLとの関連性 (図3～図6)

自覚症状と花粉飛散数は例年通り有意に相関した ( $R^2=0.69$ )。総合症状スコアの平均が12点(鼻、眼の自覚症状がすべて2点以上)を超えたのは、第10、11、12週(ピークは12週)であり前年より1週間早く、3週間認めた。これは、花粉飛散開始日が前年より4日早くなったためと考えられる。また、総合症状スコアが10点を超えた週は、全6週(第9週～14週)と昨年と同様であり、花粉飛散数の増加に伴って症状を強く訴える患者が多かった。QOLスコアの平均においても、花粉飛散数と有意に相関した ( $R^2=0.66$ ) スコアのピークが第12週であり、花粉数の飛散ピーク時期より1週間遅かった。

相関係数が昨年より高かったのは新型コロナウイルス感染症の流行期と飛散時期が重ならなかったためと考えられる。すなわち感冒様症状で受診する患者数は少なく花粉飛散数上昇に伴って受診する患者が多かったため、相関係数が2019年シーズン時まで上昇したと考えられる。

文章・画像等の内容の無断転載及び複製等の行為はご遠慮ください。

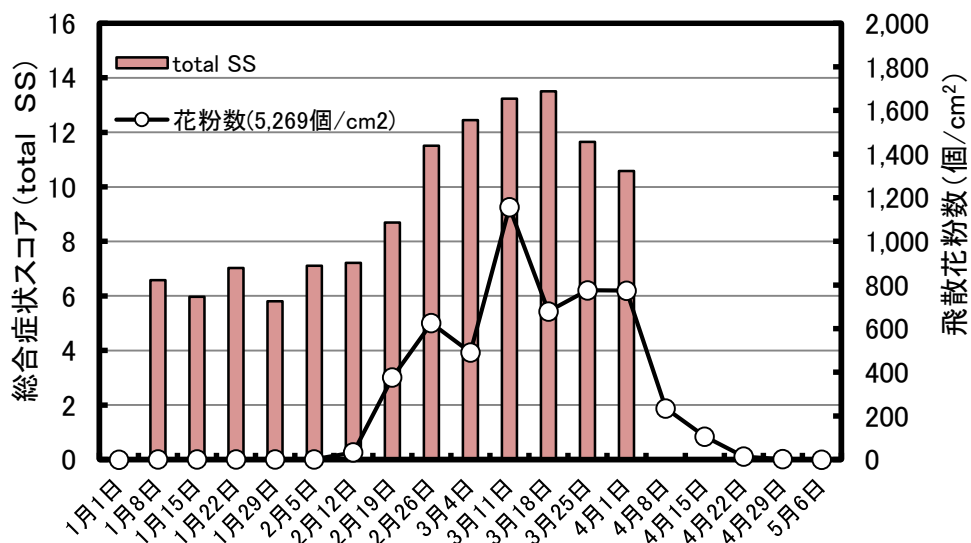


図3 週毎の飛散花粉数と総合症状スコアの平均(2024年)

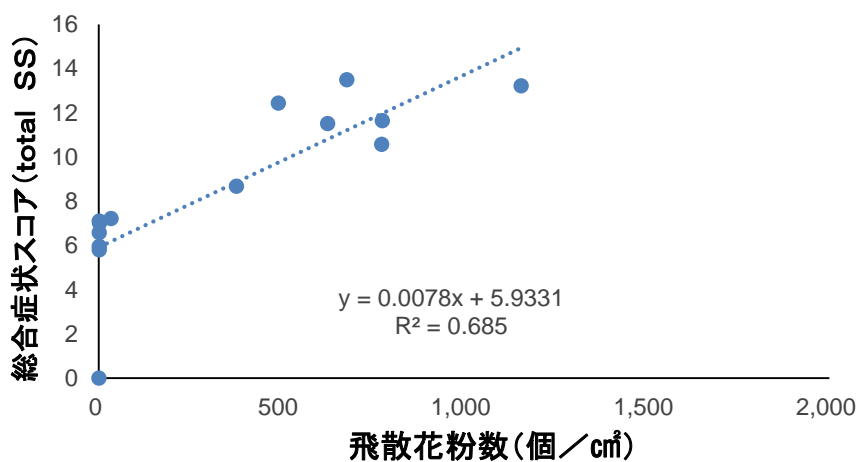


図4 週毎の飛散花粉数と総合症状スコアの平均との相関(2024年)

文章・画像等の内容の無断転載及び複製等の行為はご遠慮ください。

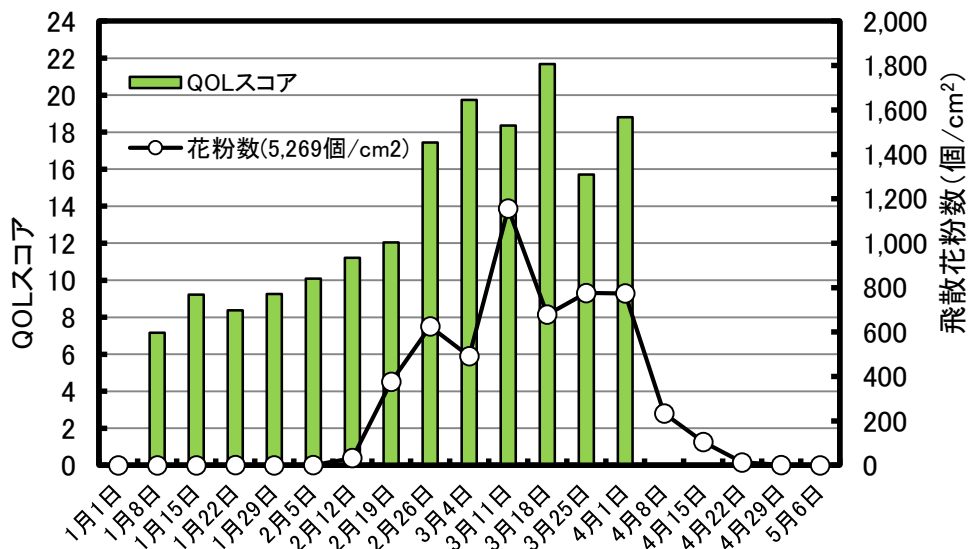


図5 週毎の飛散花粉数とQOLスコアの平均(2024年)

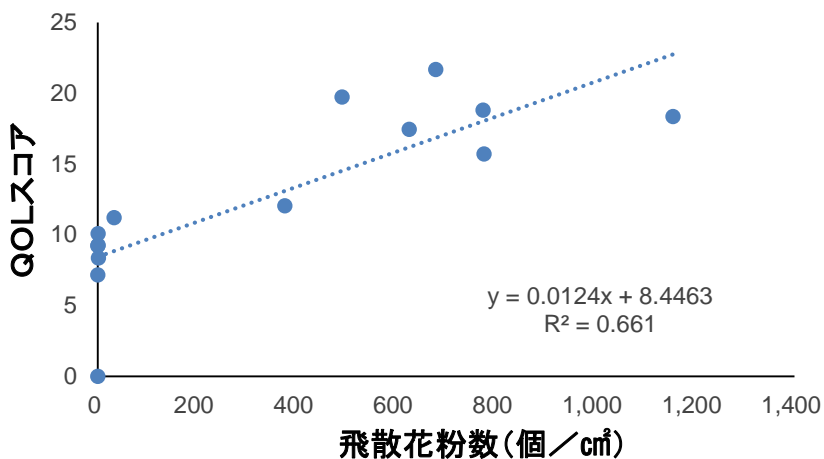


図6 週毎の飛散花粉数とQOLスコアの平均との相関(2024年)

(3) 舌下免疫療法の効果について (表2、図7)

スギ舌下免疫療法施行群は飛散ピーク時に受診した初診患者群と比較して有意に自覚症状が抑制されており、舌下免疫療法の有用性が改めて示された。また、昨年と比較して舌下免疫療法施行群の自覚症状は低い傾向を認めた (5.33)。これは今年の花粉飛散量が昨年と比較して少なかったためと考えられる。花粉飛散ピーク時における舌下免疫療法施行患者の自覚症状もスギ花粉飛散数の影響を受けるが、その変動幅が少ない可能性があり、今後データの蓄積が必要と考える。

表2 花粉飛散数と舌下免疫治療群の自覚症状

	症状平均(2024)	症状平均(2023)	症状平均(2022)
花粉飛散数	5,269	6,884	4,147
スギ舌下症状	5.33	5.82	5.13
飛散ピーク時の症状	13.37	12.91	11.75

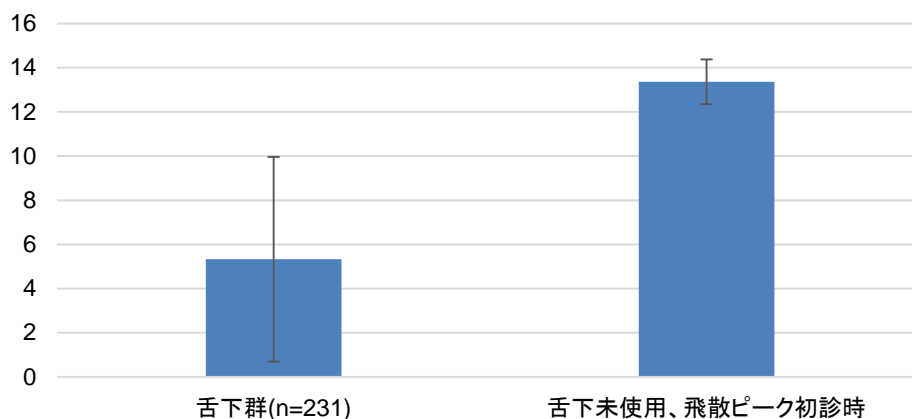


図7 舌下免疫療法群と花粉飛散ピーク時に受診した初診患者群の比較

4 まとめ

- 2024年の花粉症総患者数は1,189名で、前年の8割だった。内訳では、初診患者数、再診患者数ともに前年の8割だった。
- 初診患者数のピークは141名で、前年(228人)の6割だった。
- 総合症状スコアの平均が12点(鼻、眼の自覚症状がすべて2点以上)を超えたのは、第10、11、12週(ピークは12週)であり前年より1週間早く、3週間認めた。また、総合症状スコアが10点を超えた週は、全6週(第9週~14週)と昨年と同様であり、花粉飛散数の増加に伴って症状を強く訴える患者が多かった。
- スギ舌下免疫療法施行群は飛散ピーク時に受診した初診患者群と比較して有意に自覚症状が抑制されており、舌下免疫療法の有用性が改めて示された。花粉飛散ピーク時における舌下免疫療法施行患者の自覚症状もスギ花粉飛散数の影響を受けるが、その変動幅が少ない可能性があり、今後データの蓄積が必要と考える。